

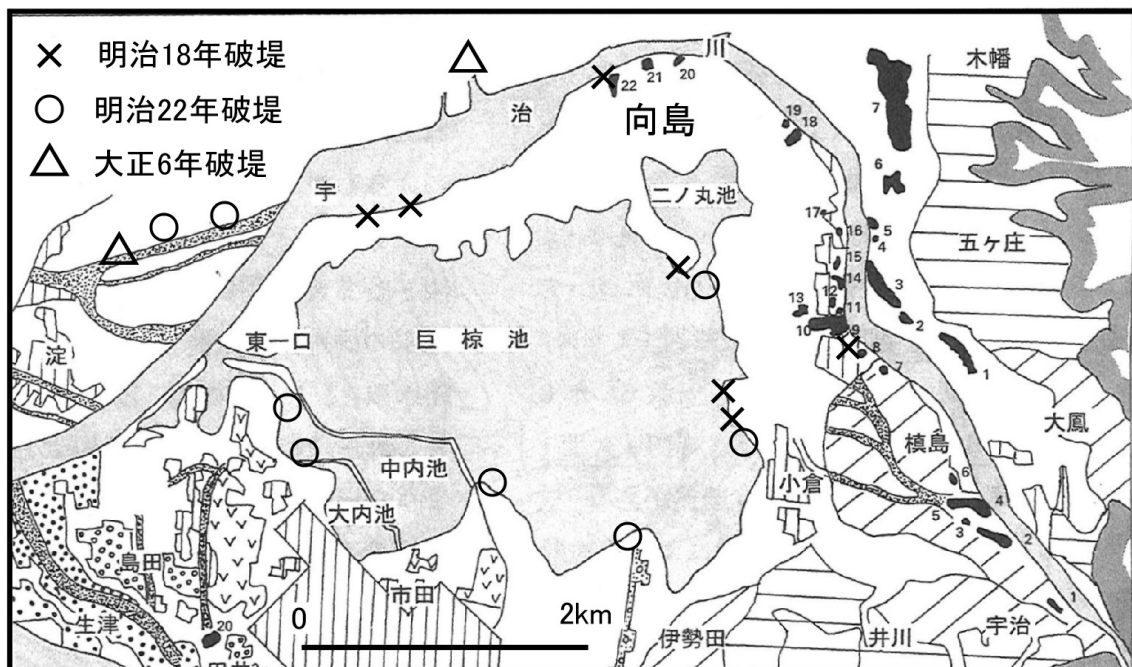
「伏見宇治川筋絵図」(天保期)による宇治川の破堤と被害状況

植村 善博*・鈴木 康久**・片山 正彦***

I はじめに

宇治川は琵琶湖から流れ出る1級河川淀川の通称で、京都府に入った辺りから八幡市の三川合流部までの名称である。宇治市で京都盆地に流入、伏見を經由して山崎地峡付近で桂川・木津川と合流して大阪平野に流入する。現在の宇治橋付近から伏見をへて淀城近辺に至る流路は豊臣秀吉の伏見城建設に際してつくられ、文禄三(1594)年頃には大名普請により槇島堤や小倉堤が完成したとされる。本来の宇治川は槇島付近から北西へ分流しつつ巨椋池に流入していた。新流路の地形的に無理な付け替えと築堤のため左岸の槇島堤は水衝部となり破堤が頻発する水難所となった。槇島堤の洪水や水害については『宇治市史年表』¹⁾や『宇治市史6』²⁾に記載がある。また、宇治川や木津川の水害史については水本³⁾、大矢・久保⁴⁾、城陽市史編さん委員会⁵⁾、植村他⁶⁾、鈴木⁷⁾

などによって論じられており、宇治川と木津川の洪水発生時期や水害の特徴、近世中期から幕末期・明治前期に向かって頻度が増加する傾向などが指摘されている。植村⁸⁾は宇治川兩岸の堤内池沼の地形的特徴と成因を比較し(第1図)、槇島村洪水絵図⁹⁾から慶応四年の破堤状況を検討した。しかし、破堤と被災状況を詳細に復元できる史料は知られていなかった。今回紹介する4枚からなる「伏見宇治川筋絵図」は伏見区向島地区における天保期の宇治川による破堤と被災とともなって作製されたもので、被害状況が詳細に記されている点で注目に値する。これらの絵図は著者の一人鈴木により新たに発見されたものである。本稿では「伏見宇治川筋絵図」を紹介するとともに、近世後期における宇治川の破堤と被害の実態について報告する。



第1図 宇治川および向島地区の概観図(植村2008に破堤地点を追加)

* 立命館大学歴史都市防災研究所客員研究員

** 京都産業大学現代社会学部教授

*** 市立枚方宿鍵屋資料館学芸員

Ⅱ 「伏見宇治川筋絵図」の概要と内容

1. 概要

「伏見宇治川筋絵図」は京都産業大学図書館の所蔵品でその登録名称である。古書店から購入されたため出所や由来等については不明である。4枚の絵図は被災状況の報告と実地検分の資料として作製され、管轄役所へ提出されたものまたはその写しと思われる。絵図ごとに縮尺が異なっており、小縮尺のものから大縮尺のものへ順にⅠ図、Ⅱ図、Ⅲ図、Ⅳ図と呼ぶことにする（第2図～第5図）。Ⅰ図は伏見市街地と宇治川周辺を示す広域図（第2図）、Ⅱ図は宇治川左岸の向島地区の概観図（第3図）、向島地区を中心に宇治川の破堤状況を示すⅢ図（第4図）、向島地区の砂入地と小字名を示すⅣ図（第5図）からなる。本絵図は天保年間に発生した向島周辺での宇治川堤防の破堤と砂入による被災状況を詳細に記録している点に特徴がある。これらと同程度の詳しい近世水害絵図は淀川付近では発見されておらず¹⁰⁾、類例の少ない貴重なものと考えられる。次に各図の内容を述べていく。

2. 絵図Ⅰ図（第2図）の内容

Ⅰ図はヨコ65.5 cm・タテ48 cm、伏見奉行所管轄下の伏見町と伏見廻り八カ村を中心に描く広域図である。伏見町および三栖、毛利治部、景勝、深草、大亀谷、堀内、六地藏、左岸の向島および葎島新田の村名を記入する。伏見町付近の道筋および川や堀、橋を描き、京橋、肥後橋、豊後橋、宇治橋、淀小橋、小倉橋の名をあげる。宇治川の国役堤は黒太線で描かれ、宇治橋下流から豊後橋に至りここで2本に分岐する。下流へは宇治川と葎島新田を分ける堤防となる。豊後橋より南へは小倉堤が小倉橋まで描かれ、堤の西側に大池、東には常水場が青色で示される。一方、伏見町より下流では右岸の三栖村から淀小橋に至る淀堤が続く。向島村と六地藏村間の宇治川筋には不規則な多数の中州が描かれている。ここは山科川が合流する湿地帯を形成していた。なお、裏書に「天保八申年三月淀表郡改にて差上候 天保九戌年□三月廿六日御国廻し □四月四日同料廻し 御巡見」と記す。

3. 絵図Ⅱ図（第3図）の内容

Ⅱ図はヨコ61 cm・タテ41 cm、宇治川左岸の向島村

の領域を黄色で描いたものである。北に大きく宇治川筋を描き、黒太線で国役御普請場（国役堤）を明瞭に描く。地図中央に横島堤と小倉堤に囲まれた向島村の土地が描かれ、向島集落との間には他領と記す向島城の領域、南には横島村領が示される。両者の間の土地は田地（黄色）と水域（水色）に分けられる。左岸に横島堤、豊後橋以南に大和海道往還境筋を描く。豊後橋より南には往還を挟んで両側町をなす町並みを描く。これは江戸期に成立した伏見向島橋詰町、同中之町、同下之町の町場で伏見町に組み込まれ、向島村および葎島新田とともに伏見奉行所支配下におかれた。一方、横島堤沿いには上島と下島の集落が成立したと推定されるがこれらは示されない。「天保郷帳」に向島村606石1斗4升、明治10年代には130戸699人が記される¹¹⁾。町場の東側には白色で他領と記される方形の土地がある。これは秀吉が伏見城の出城として築いた向島城跡であり、一時期徳川家康が居城としたが慶長地震により倒壊した。この城跡部分は幕府直轄地とされていたと思われる。豊後橋以西には葎島堤と葎島新田の一部が描かれる。また、堀内村領の飛地もある。葎島は宇治川と巨椋池との境界付近に多数の中州や浅瀬が点在する場所で、好漁場でもあった。享保七（1722）年に堀井長円が払い下げをうけ、享保十八（1733）年に面積120町歩が葎島新田として高入地となった。「天保郷帳」で石高644石7斗9合と記すが、およそ半分が水没して開墾は困難をきわめたという¹²⁾。一方、南方に接する久世郡横島村は上村、下村、東目川、西目川、三軒屋の5集落を合わせた村域を有する。後二者は小倉堤上の路村である。「天保郷帳」によれば3128石2斗6升9合の大村であった。しかし、文化・文政期の収穫は毛付高で約2割、村高では1割弱にすぎなかったとされる¹³⁾。

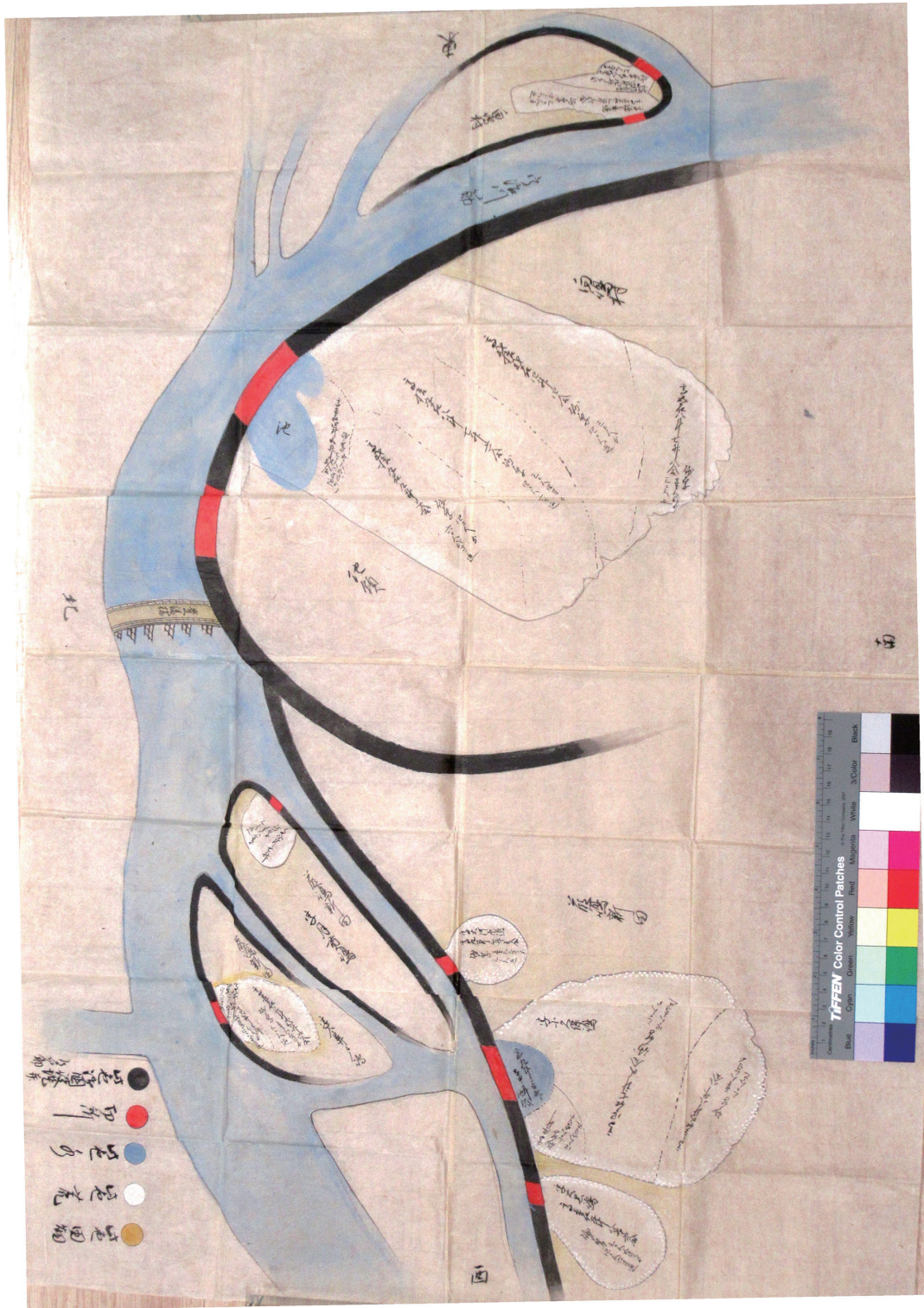
絵図中央に横島・小倉両堤に囲まれた向島村の田地が黄色で示され、横島堤下に3つの池が存在する。これら堤内池沼は方向性をもつことから破堤に伴う押堀と推定される。池から水路が直線状に南西にのび5本が常水場へ達する。また、堤下から発する水路もあり、宇治川からの伏流水によって涵養されていると推定される。横島堤は完全に連続した状況を示しており、破堤前の状況を示すものであろう。常水場は小倉堤により巨椋池から切り離された池の一部である。また、宇治川筋に中島が描かれ、中央のものは六地藏村領、西側のものは堀内村領と接する状況を示す。



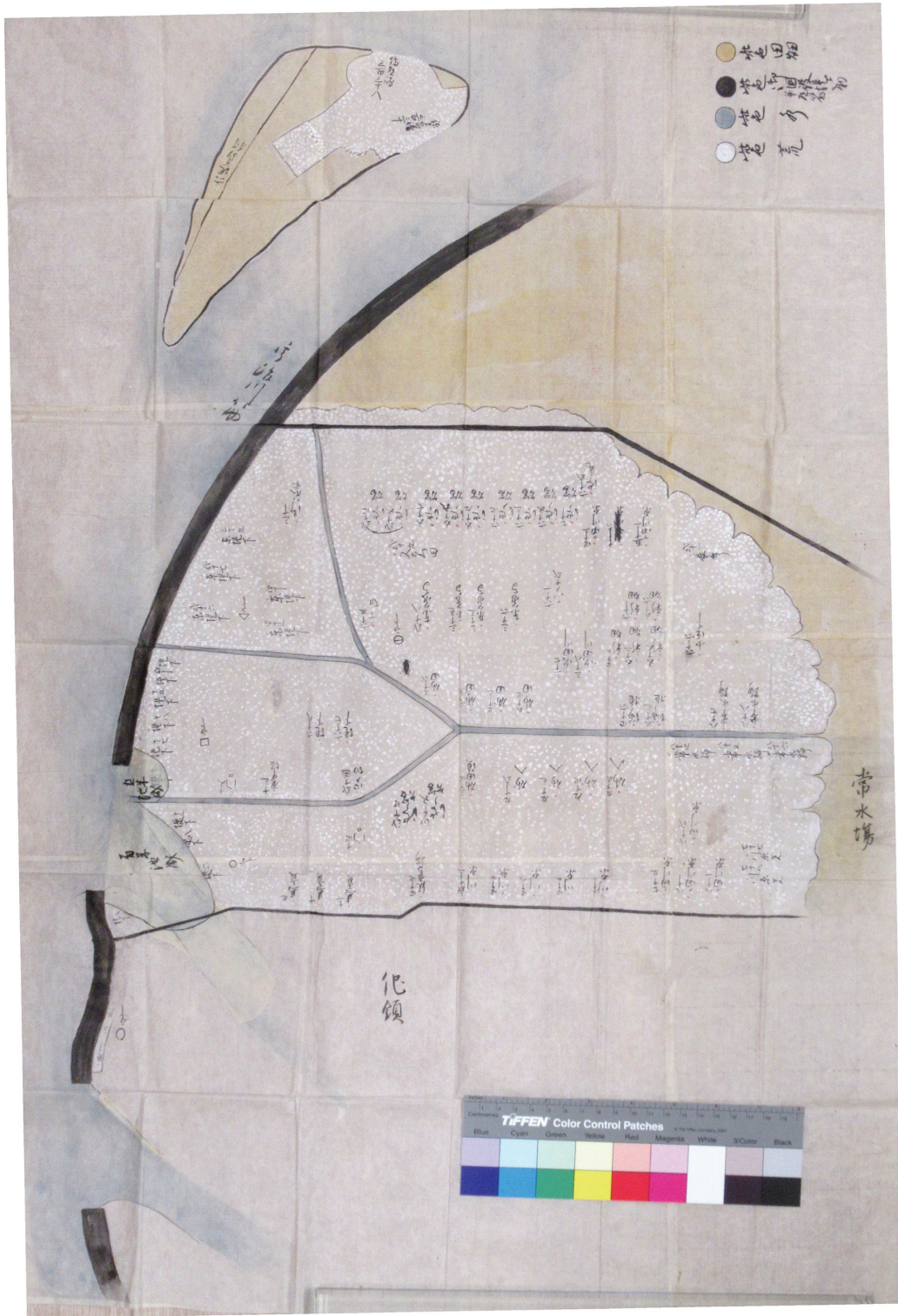
第2図 「伏見宇治川筋絵図」のI図
(京都産業大学図書館所蔵)



第3図 「伏見宇治川筋絵図」のII図
(京都産業大学図書館所蔵)



第4図 「伏見宇治川筋絵図」のⅢ図
(京都産業大学図書館所蔵)



第5図 「伏見宇治川筋絵図」のIV図
 (京都産業大学図書館所蔵)

4. 絵図Ⅲ図(第4図)の内容

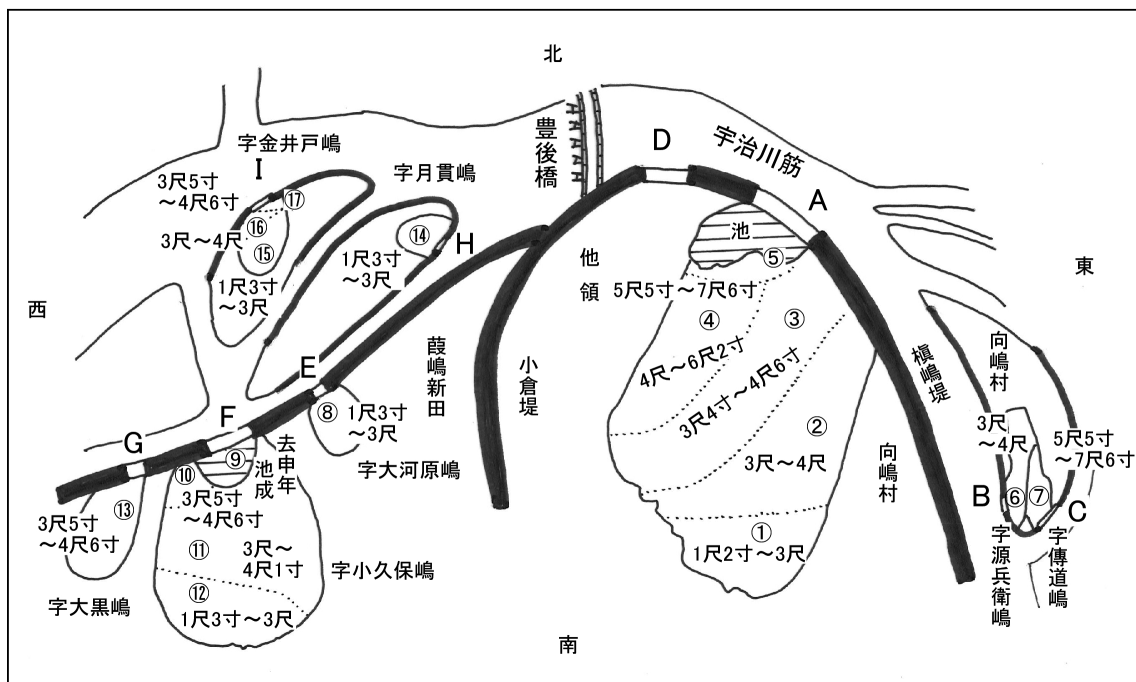
Ⅲ図はヨコ 80 cm・タテ 55.5 cm、豊後橋を中央において宇治川を大きく描き、左岸の榎島堤、小倉堤、葭島堤を黒色で太く示す。川筋の中島を描き、上流のものは源兵衛島、下流のものは月貫島と金井戸島である。これらの中島の堤防はいずれも下流側で中断しており馬蹄形を示す。堤防の切所を赤色で示す点が注目される。本図をもとに作製された第6図によると切所は榎島堤にAとDの2カ所、源兵衛島にB、Cの2カ所、葭島堤にE、F、Gの3カ所、月貫島のHと金井戸島のI、計9カ所が示される。切所の堤内側に白色で荒の範囲を示す。なお、AとFの切所には池が描かれ、前者は「池」、後者には「去申年池成」と記す。白色部は砂入により潰地となった年貢地の範囲を示すもので、それらを細分し荒高と砂厚が記載される。砂厚は尺寸単位で示され、堆積土砂の層厚を実測した値と推定される。ただし、Dの切所は他領のためこれらの記載を欠く。第1表にA～Iの荒高と砂厚を示す。以下、切所ごとに内容のみてみよう。切所Aによる荒は5区分され、④は29石9斗3合と最大を示す。Aにおける荒高の合計は79石1斗5升3合である。切所Bは字源兵衛島で1石3斗2合、切所Cの字傳道島は6斗9升3合と記す。下流の葭島堤では3カ所の切所が生じた。字小久保島のFが最大で押堀が形成されている。これは4区分され荒高の合計は8石1斗3合となる。Eの字大河原島は9斗3升1合およびG

の字大黒島は1石9斗8升6合と記す。また、字月貫島のHで8斗7升、字金井戸島のIは3区分され合計は2石4斗4升6合である。

一方、砂厚は破堤により農地上に堆積した石砂の厚さを示し、最小1尺2寸から最大7尺6寸までの値が記される(第6図・第1表)。AおよびCで最も厚く5尺5寸～7尺6寸に達する。つぎに、榎島堤のAでは堤防直下の押堀に接する⑤は5尺5寸～7尺6寸と砂厚は最大値を示し、南方へ離れるにしたがって徐々に薄くなり、最南部の①では1尺2寸～3尺と半分以下に減少する。葭島堤のFでも同じ傾向がみられ、池の西に接する⑩で3尺5寸～4尺6寸で南方の⑫では1尺3寸～3尺に減じている。金井戸島のIでは⑬の3尺5寸～4尺6寸から南端の⑭で1尺3寸～3尺に減じる。

5. 絵図Ⅳ図(第5図)の内容

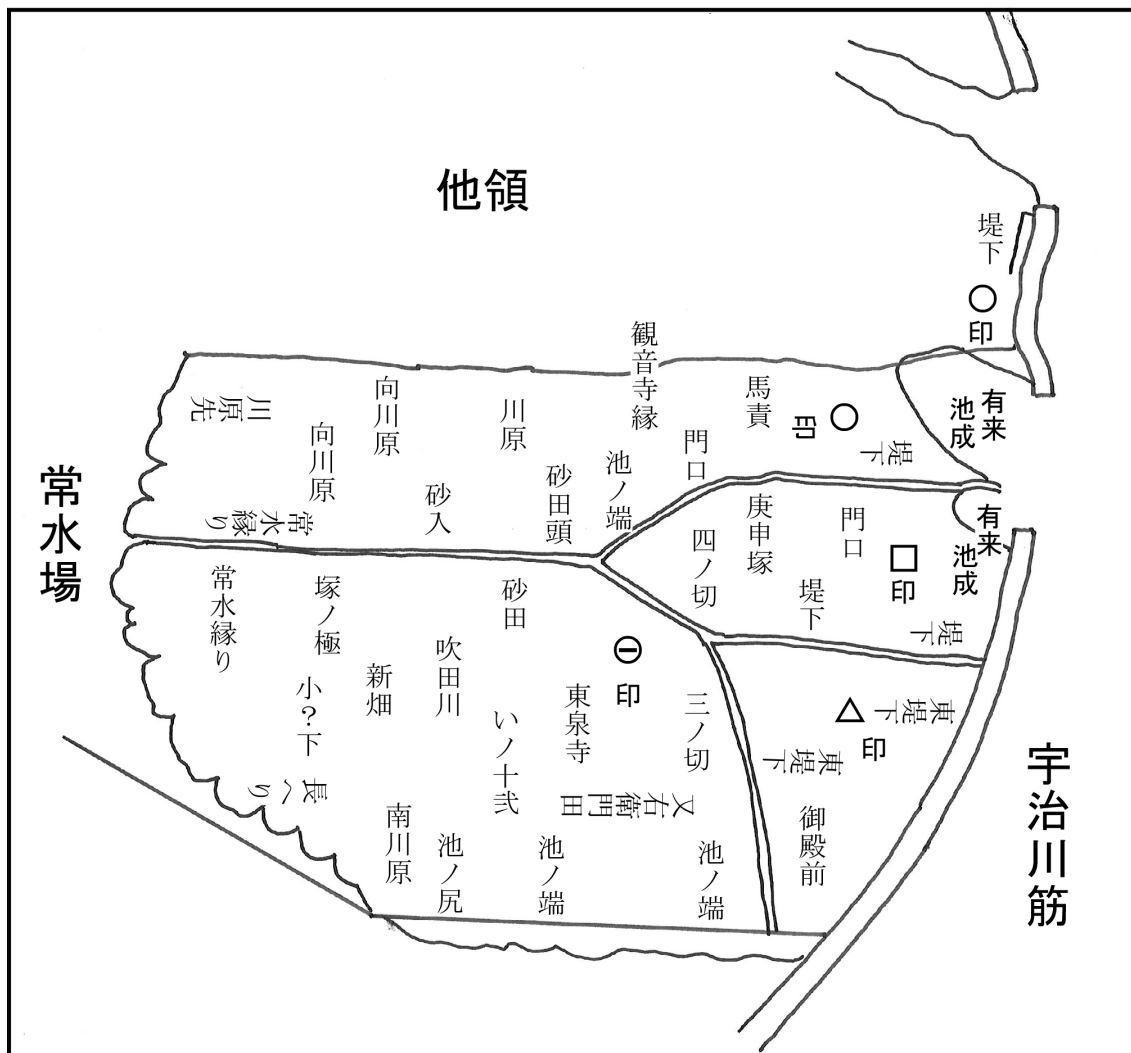
Ⅳ図はヨコ 80 cm・タテ 53.5 cm。宇治川左岸の榎島堤を大きく描き、堤内の向島村領および源兵衛島の切所と荒の範囲を白色で示す。榎島堤の切所Aの荒を詳細に示し、小字名と地番を記す。第7図に源兵衛島を除いた向島村領の小字名を示す。まず、榎島堤が2カ所で破堤しており、下流側のDは他領であって詳細は記されない。切所Aには連続した2つの池が描かれ、両者に「有来池成」と記す。南方へ広がる荒は4区分されており、境界は水路に一致する。そして、各区の中央に○△



第6図 向島村付近の破堤(A～I)と堆積土砂の厚さ(Ⅲ図より編集)

第1表 破堤地における荒高および砂厚（Ⅲ図より作製）

破堤記号	村 字名	地点番号	荒高 状況	砂厚
A	向島村	①	高5石8斗7升8合	1尺2寸~3尺
A	向島村	②	高22石4升4合	3尺~4尺
A	向島村	③	高19石8斗7升6合	3尺4寸~4尺6寸
A	向島村	④	高29石9斗3合	4尺~6尺2寸
A	向島村	⑤	高1石4斗5升2合 池	5尺5寸~7尺6寸
B	向島村 字源兵衛嶋	⑥	高1石3斗2合	3尺~4尺
C	向島村 字傳道嶋	⑦	高6斗9升3合	5尺5寸~7尺6寸
E	葭島新田 字大河原嶋	⑧	高9斗3升1合	1尺3寸~3尺
F	葭島新田 字小久保嶋	⑨	高9斗1升 去申年池成	—
F	葭島新田 字小久保嶋	⑩	高9斗	3尺5寸~4尺6寸
F	葭島新田 字小久保嶋	⑪	高4石7斗5合	3尺~4尺1寸
F	葭島新田 字小久保嶋	⑫	高1石5斗8升8合	1尺3寸~3尺
G	葭島新田 字大黒嶋	⑬	高1石9斗8升6合	3尺5寸~4尺6寸
H	葭島新田 字月貫嶋	⑭	高8斗7升	1尺3寸~3尺
I	葭島新田 字金井戸嶋	⑮	高1石3斗2升6合	1尺3寸~3尺
I	葭島新田 字金井戸嶋	⑯	高2斗7升	3尺~4尺1寸
I	葭島新田 字金井戸嶋	⑰	高8斗5升	3尺5寸~4尺6寸



第7図 向島村 A 破堤による砂入地と小字名（Ⅳ図より編集）

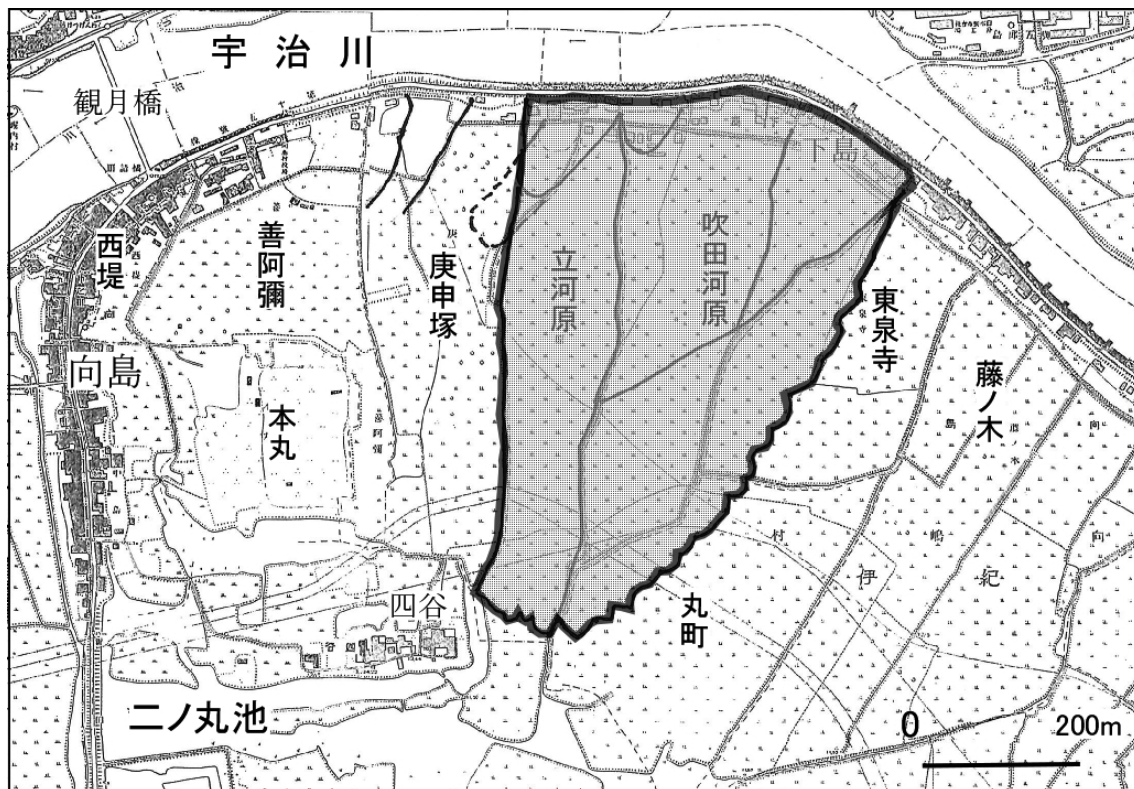
□などの記号と印が記される。また、他領の堤下にも細長い土地があり○印を記し、向島村領地であることを示す。つぎに小字名に注目すると、三ノ切、四ノ切、川原、向川原、川原先、南川原、砂田、砂入などの名称が特徴的である。また、横島堤直近の字名は堤下で統一されている。一方、池ノ端、池ノ尻は低湿地環境を暗示する。南端の常水縁りは荒が常水場(水域)にまで達したことを示す。東泉寺は現在の町名として、庚申塚は庚申町として現存する。観音寺縁や御殿前はかつて存在した建物の痕跡かもしれない。以上の記述をもとに破堤の位置および荒の範囲を地形図に復元したのが第8図である。

Ⅲ. 考察

1. 絵図の製作年代と目的

「伏見宇治川筋絵図」はI図の広域図からIV図の詳細図までスケールの異なる4枚の絵図からなり、一連の水害絵図として作製された可能性がある。内容は宇治川洪水により向島村と葎島新田に発生した破堤と砂入による被災状況を示す。絵図は向島村の庄屋ら村役人により作製され、管轄の伏見奉行または京都町奉行へ提出されたものであろう。では、被災はいつであろうか。I図の裏

書に「天保八申年三月淀表郡改にて差上候」と記す。これから、天保八年三月以前の洪水記録をみると「天保七年七月八日大雨により宇治川増水、通門前袋町で溢水、淀川筋の通船が欠航。八月一五日連日の降雨により大久保、小倉、六地藏など各所に浸水、木津川増水して淀大橋付近の堤切れる」の記載¹⁴⁾が直近のものである。本絵図は天保飢饉の最中、天保七(1836)年七月または八月の宇治川洪水による破堤および被災状況を示したものであろう。同裏書に「天保九戌年□三月廿六日御国廻し□四月四日同料廻し 御巡見」とあり、洪水発生から約半年後の翌年三月に絵図を提出、翌翌年の天保九年三月、四月に役人による現地の巡見が実施されたことを示す。国役堤である横島堤防の破堤であり、これらの絵図は最終的には幕府に達し巡見および堤普請の資料とされたのであろう。幕府の「諸国巡見使」については、寛永十(1633)年に始まったとされ、江戸期には9回の巡見が行われている。天保九年の巡検は、天明八(1788)年以来約50年ぶりの巡見となり、天保九(1838)年には諸国を8ブロックに分けて行われた。五畿における諸国巡見使は使番が山本七郎左衛門正朝、小姓組が三宅三郎、書院番が市岡内記、御料担当は武島、岡田、小川の3名である¹⁵⁾。また、天保九年が最後の巡見となった。絵図



第8図 向島A破堤による砂入地の復元(原図は大正11年測量3千分の1京都市都市計画基本図 向島・木幡池)

に国役御普請場の記述があるように宇治川は国役普請で行われていた。淀川水系の河川管理については、近江・大和・摂津・河内にわたる土砂留制度が発足した貞享元(1684)年は京都町奉行が統括していたが、貞享四(1687)年に宇治川以下の淀川筋が大坂町奉行の管轄となった。『川筋御用覚書』によると享保三(1718)年から淀小橋より上流の宇治川と木津川が伏見奉行の管轄になった¹⁶⁾。元文二(1737)年に淀小橋から下流の山城国の部分が京都町奉行の管轄となり、淀川の管轄と定まったとある。京都町奉行の天保九年二月の町触の覚に「一今度諸国巡見雖被仰付、国絵図城絵図無用之事 一人馬家数無用之事」¹⁷⁾とあるが、宇治川の普請に関する記述を他の史料から見つけることはできなかった¹⁸⁾。

2. 宇治川の国役堤と破堤地形

宇治川流路の左岸に築造された檜島堤は流水をまともに受ける水衝部となり、破堤が頻繁に発生する水難所に変貌した。一方、右岸側には本格的な堤防は建設されず、洪水時には流路となる状況が続いた。このため、兩岸の地形環境の差は堤内池沼に明瞭に表れ、左岸に多数の押堀が分布するのに対し、右岸には流路跡による池沼が大部分を占める(第1図)。天保七年洪水により宇治川左岸に発生した破堤は向島村の3ヵ所と他領1ヵ所、葭島新田の5ヵ所の計9ヵ所であった。第6図の切所Aによる押堀は第1図の20に相当し、明治42年測図の地形図には存在するが大正11年測量の京都市都市計画基本図では消滅している。第7図ではAの押堀に「有来池成」と記されることから、天保七年以前の押堀が存在していた可能性が高い。また、Fの押堀には「去申年池成」と記されるから天保七年(丙申)に形成されたものである。一方、宇治川筋の源兵衛島、月貫島、金井戸島では、堤防が下流側で中断する尻無堤として描かれている。但し、第5図では源兵衛島は不連続堤として描かれる。濃尾平野西部の輪中地帯では近世以前の輪中は尻無堤であり、その後に完全に締め切られ輪中に進化したとされる¹⁹⁾。宇治川の尻無堤はその存否およびどのような意味をもつものかについて今後の検討を要する。

3. 本洪水による破堤と砂入による被害状況

第6図は本洪水により檜島堤や葭島堤などに生じた9ヵ所の破堤と砂入荒を示す。最大の被災は向島村のAであり、破堤地点からはほぼ南に向かって広がり常水場で

終わっている。この荒高は合計79石1斗5升3合に達する。葭島新田ではFの字小久保島で荒高8石1斗3合である。結局、向島村で荒高81石1斗4升8合、葭島新田で荒高13石4斗5合となり、被害合計は95石4斗8升4合に達した。一方、堆積した石砂の層厚が計測されたのは、起返しに要する日数や労力の推算に必要なためと推定される。砂厚の値に注目すると最大7尺6寸(約2.3 m)から最小1尺2寸(約0.4 m)までの値が記されている。砂厚は豊後橋より上流部が下流部より大きい傾向を示す。また、押堀に接する地区で最大値を示し、そこから隔たるにつれて砂厚が徐々に薄くなっていく。最も厚い堆積はAおよびCの5尺5寸~7尺6寸で、約1.7 m~2.3 mにも達する。これは当時の宇治川の運搬土砂量が現在よりはるかに多量であったことの証となる。第6図に示された詳細な砂厚は近世末における河川水利状況や破堤砂入の実態を示す貴重な値であり、宇治川や木津川の近世絵図でこれほど詳細に砂厚を記したものは知られていない。

4. 向島村における荒の小字地名

第7図は向島村の破堤Aにおける小字名を記す。これには三ノ切、四ノ切および川原、向川原、川原先、南川原、砂田、砂入など破堤および砂入に伴う地名が多く、繰返し破堤が生じてきたことを示唆する。東泉寺はほぼ同位置に現町名が存在するが、庚申塚は現存の庚申町の位置とは合わず、他領に属する位置にある。また、観音寺縁および御殿前の字名はかつて存在した建物を暗示する可能性があり、今後文献などによる検討が望まれる。

荒の実態は不明だが、寛延二年の堤切に関する絵図に「地面畦境等茂不相立、一面之荒所ニ相成候事」²⁰⁾との記述からある程度の推定ができる。なお、水路で分けられた4地区に記される○△□などの記号と印の字はこれが写しであり正本には実印が押されていたと思われる。したがって、4地区は各々異なる4人が管理する土地であったと推定される。これらの境界となる水路などは大正11年の都市計画基本図にも描かれており、これらをもとに第8図の荒の範囲を復元した。これによると向島村領内の破堤Aによる荒の範囲は東西幅最大約400 m、南北延長最大650 mのV字状形態をなし、この面積は約25.6 ha (25.55万m²)に達する。これは現在の向島立河原町、吹田河原町、東泉寺町の三町の範囲に及ぶ。

IV. まとめ

1. 「伏見宇治川筋絵図」は4枚の絵図から構成され、向島村とその周辺において天保七年に発生した宇治川洪水による破堤と被害状況を示す。これら絵図は村方から管轄役所に提出されたものと考えられる。
2. 天保七年の宇治川洪水により向島村とその周辺で発生した9カ所の破堤とそれによる荒の範囲が示される。破堤AおよびFでは押堀が形成されたが、Aには以前から池がありFでは今回新たに形成された。最大規模の破堤は向島村のAで荒高は79石1斗5升3合、向島村全体では荒高81石1斗4升8合に達した。また、葭島新田では13石4斗5合である。両者を合わせて荒高は95石4斗8升4合である。
3. 破堤に伴う砂厚は最大7尺6寸(約2.3m)から最小1尺2寸(約0.4m)までの値が示される。宇治川の上流部が下流部より砂厚が大きい。また、破堤部では堤防直近で砂厚が大きく離れるにつれて徐々に小さくなる。また、当時の宇治川の運搬土砂量は現在に比べて大きかったことを示す。
4. 向島村の破堤Aによる荒の範囲を地形図上に復元し、その面積は約25.6haと推定した。ここでは切や川原、砂田、砂入などの小字名が特徴的であり繰り返し破堤が発生してきたことが推定される。

謝辞

調査にあたり京都府立京都学・歴史館若林正博氏、宇治歴史資料館小嶋正亮氏・坂本博司氏、京都市歴史資料館、大阪市史編纂所の皆様には親切に協力いただきました。記して感謝申し上げます。

注

- 1) 林屋辰三郎編『宇治市史年表』、宇治市役所、1983、2～705頁。
- 2) 林屋辰三郎・藤岡謙二郎編「横島」『宇治市史6宇治川西部の生活と環境』、宇治市役所、1981、332～392頁。
- 3) 水本邦彦「江戸時代の木津川の水害」『南山城地域学術調査報告』、京都府立大学、1990、1～13頁。
- 4) 大矢雅彦・久保純子『淀川水害地形分類図・説明書』、淀川工事事務所、1993。
- 5) 城陽市史編さん委員会編「用水と水害」『城陽市史第1巻』、城陽市役所、2002、693～712頁。
- 6) 植村善博・小林善仁・木村大輔・進藤美奈・山中健太・浅子里絵・杉山純平・三宅智志・山下博史「木津川・宇治川低地の地形と過去400年間の水害史」京都歴史災害研究7、2007、1～24頁。
- 7) 鈴木一久「近世における山城地域の水害」、近畿大学教職教養部紀要20、2008、37～58頁。鈴木一久「京都南部、巨椋池干拓地と周辺地域の歴史」堆積学研究68、2009、49～57頁。
- 8) 植村善博「京都盆地南部における堤内池沼の地形的・防災的意義」歴史都市防災論文集1、2007、67～74頁。植村善博「京都盆地南部、木津川・宇治川の水害地形」佛教学部文学部論集92、2008、29～43頁。
- 9) 宇治市歴史資料館『宇治の古地図－ふるさとの風景－』、宇治市歴史資料館、1989、69頁。
- 10) 京都府立京都学・歴史館、京都市歴史資料館、宇治市歴史資料館、大阪市史編纂所における調査では確認できなかった。
- 11) 京都市編「向島村」『史料京都の歴史 第16巻伏見区』、京都市、454～473頁。
- 12) 京都市編「葭島新田」『史料京都の歴史 第16巻伏見区』、京都市、474～483頁。
- 13) 2)に同じ。
- 14) 林屋辰三郎編『宇治市史年表』、宇治市役所、1983、426頁。
- 15) 半田隆夫「幕府巡見使体制と西国経営」『近世日本の政治と外交』(藤野保先生還暦記念会編)、雄山閣、1993、161～186頁。川端二三三郎「綾部地方を訪れた巡検使」綾部史談117、1985、2～7頁。
- 16) 大谷貞夫『江戸幕府治水政策史の研究』、雄山閣、1996、76～86頁。村田路人『近世の淀川治水』、山川出版社、2009、92～98頁。村川行弘「近世淀川治水史」大阪経済法科大学論集10、1980、1～28頁。
- 17) 京都町触研究会編『京都町触集成第十一巻』、岩波書店、1986、96～97頁。
- 18) 黒板勝美編『統徳川實紀』(新訂増補国史大系49)、吉川弘文館、1966。石井良助編『御家當令條第2』、創文社、1959。高柳眞三・石井良助編『御觸書天保集成 下』、岩波書店、1958。
- 19) 伊藤安男『治水思想の風土 近世から現代へ』、古今書院、1994、284～312頁。
- 20) 京都府立京都学・歴史館蔵「宇治川筋向島村細図」。

- 1) 林屋辰三郎編『宇治市史年表』、宇治市役所、1983、2～

Abstract

Bank Breaks and Damage Conditions caused by Flood of the Uji River based on River Maps of Fushimi- Ujigawasuji in Tenpo-Period,Edo Era

UEMURA Yoshihiro, SUZUKI Michihisa and KATAYAMA Masahiko

River maps of Fushimi- Ujigawasuji consist of four maps showing bank breaks and damages caused by flood of the Uji River in Tenpo-period, Edo Era. These maps have newly discovered and belong to Library of Kyoto Sangyo University. The purpose of this paper is to discuss the bank breaks and damage conditions caused by flood of the Uji River in Tenpo- period on the basis of interpretation of these maps.

The results are as the following.

- 1) River maps of Fushimi- Ujigawasuji were drawn for illustration of bank breaks and damages by deposition of sand and gravel by flood of the Uji River at 1836 (seventh, Tenpo-period)
- 2) By the 1836 Flood, nine bank breaks were happened in Mukaijima and Yoshijimasinden villages and suffered rice loss of ninety five Koku (石) four Tou (斗) eight Shou (升) and four Gou (合). Deposits of sand and gravel caused by bank breaks were measured and attained from 0.4 m to 2.3 m in thickness.
- 3) Thickness of sand and gravel deposit tends to decrease from upstream to downstream, and from point of bank break to distance away from there. Traction load of River Uji in this period was much more than present period.
- 4) The extent of damaged area by sand and gravel of bank break of A is precisely reconstructed on topographical map and its damaged area is estimated about 25.6ha.

Keyword: flood of the Uji River, bank break, damage conditions, river maps of Fushimi -Ujigawasuji